定本 横光利一全集

定本

# 横光利一全集

第六卷

河出書房新社

定本 横光利一全集 第六卷

昭和五十六年十二月二十日 初版印刷
昭和五十六年十二月三十日 初版發行

著者 横光利一
校訂者 保昌正夫
發行者 清水 勝

發行所 株式會社 河出書房新社
東京都渋谷區千駄ヶ谷二―三二―二
電話 四〇四―一二〇一（營業）
四〇四―八六一一（編集）
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 多田印刷株式會社
製本 小高製本工業株式會社
Printed in JAPAN
© 一九八一

# 目次

時計　3
盛装　207
榛名　406
比叡　421
解題　保昌正夫　437
編集ノート

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

定本

# 横光利一全集

第六巻

# 時計

少し寒さに向つて來た。雪枝と宇津は上野公園の方へ自動車を走らせてはゐるのだが、曇り日のうへに、窓から流れ込む風が背面のガラスにあたつて吹きかへつて來るので、寒さが鋭く二重になつて首筋のあたりを襲つて來る。宇津は雪枝に誘はれて出て來たものの、少し風邪氣味もあるので、一層用心をしなければならぬと思ひながら、街街の雜沓を眺めてゐた。彼は雪枝がどのやうな思惑で自分を誘つたのか分らなかつたが、雪枝の話したところでは、姉の瀧子は用があるので、もう一時間も前に銀座へ出て、そこから音樂學校へ直接いつてゐるとの事であつた。宇津は何故だかこの日に限つて、ひどく周章ててゐる雪枝の容子を見ながら訊ねた。

「切符はしかしそんなに澤山あるんですか。」

「ええ、澤山あつたの。だけど、皆お友達が來て持つていつてしまつたの。」

それでは、今日は向ふへ行けば、いろいろな知人に逢ふわけだと宇津は思つた。

彼は雪枝の家の門を這入らうとしたとき、そこへ中から丁度彼女が出て來たのである。自動車が公園の中へ這入つてから、樹樹の間を通り抜けて圖書館裏へ出ると、ひどく古風な音樂學校の入口はすぐそこから眼に見えた。もう演奏會は始つてゐるらしく、出入する人々は誰もなかつた。二人は陰鬱な狹い二階へ昇つてドアを靜かに開けてみた。その拍子に、ぱつと輝くやうな明るい混聲合唱のアルトが、いきなり高く耳を襲つて來た。メンデルスゾーンの「春の訪れ」である。宇津は空いてゐた椅子へ雪枝と竝ぶと、數間にわたる巨大なパイプオルガンの銀色の筒の前で、總勢四五十人もゐる男女の學生達の唄つてゐる顏を見廻した。すると、左翼となつて塊つてゐる黑い服裝の女生徒達の中に混つて、明子の顏がすぐ見えた。明子はピアノ科を來春卒業する雪枝の友人である。明子の顏は澤山の顏の中に混つてゐても際立つて白く、大きな眼は譜の上へ落ちてゐるので、日ごろの快活さに似ず物靜な優しさをたたへて宇津には見えた。

宇津は明子と雪枝の家で逢つてからもう三ヶ月もたつてゐる。そのときはこれから誰も避暑に出かけようといふときで、明子も明後日から信州の山の中へ行くのだと云つてゐた。

宇津と明子が最後に別れたときは、二人が一緒に雪枝の家から出て來て、電車道へ行き着くまで竝んで歩いたときであつた。そのとき、明子は自分の友人の兄に音樂の研究家のゐることを話して、ふと何事か思ひ出しでもしたやうに、突然默つてしまつたことを宇津は思ひ浮べた。それは別に何事でもなかつたかもしれない。しかし、考へれば、それは一應宇津の氣がかりなことでないこともないのだつた。

「いや、妙なところがあるにはある。」と宇津は今も思ひ出した。しかし、今までそれを何故自

分は考へ出さうとしなかつたのであらうか。もしかしたなら、今日はこの聽衆の中に、その友人の兄といふ人物が潛んでゐるかもしれたものではない。いや、きつとゐる。ゐなければならぬ。——だが、それがどうしたといふのだ。

宇津はしばらくコーラスの變調する波の間に間に、再びとりとめのない追想の馳け廻るのを感じていつた。すると、突然、急激に高まり出した男性のバスにひきよせられたと思ふ間に、雪枝の姉の瀧子の顏が眼に浮んだ。瀧子は、何故今日に限つて雪枝を殘してひとり銀座へ出ていつたのだらう。演奏會になら一緒に雪枝と出て行くべきではないか。——

「しかし、これは自分は疑ひすぎる。」

「何ものも疑ふな。」——かういふ風な場合に、こんなに自分を壓へることは宇津の日常の精神を指導してゐる一つの道德ともいふべきもので、彼はこれを使用して、むらがりよつて來た想念を整理する度に、いつもその日は良い行ひをしたと、先づ一應は思つて喜ぶ習慣を持つてゐた。

コーラスが終つて幕が閉ると人々はざわめいた。雪枝は聽衆の中から知人の顏を探さうとして場内を見廻してゐるうちに、急に彼女の顏は笑顏に變つてお辭儀した。と、また新たな笑顏をちらちらさせながら、遠くへ向つて會釋をした。宇津は彼女の笑顏の向つてゐる方向へは頭を向けずに、膝の上のプログラムを眺めてゐた。次ぎはピアノの獨奏である。

「宇津さん、ちよつとお友達が來てゐるのよ。いつてくるわ。」

雪枝が出ていつてから二三分もすると、宇津の横の入口から合唱團の男女の學生の群れが、濁つた生溫い空氣を渦卷かせながら、顏を熱てらしてどやどやと場内へ雪崩れて來た。宇津は退屈

まぎれにそれらの顔を眺めてゐるとひよつこり明子の顔がすぐ眼の前へ現れた。しかし、明子はあまり宇津と接近し過ぎてゐるために、足もとに宇津のゐることには氣付かなかつた。彼は明子が自分を認めるのを、今か今かと待ち受けながら彼女の顔を見つづけたが、たうとう明子は宇津の膝をかすめながらも、ずつと後ろの遠方にばかり氣を取られて、順次に後から押されながら進んでいつた。

宇津は力を落しながらも明子の進む方向を見守つてゐると、ふと、後ろの方で明子をじつと見詰めてゐる一人の青年の視線に逢つた。それは、その瞬間、宇津に一切の音響がぴつたりと停止したかのやうに思はれたほど、端麗な顔をしてゐる長身の青年であつた。

「あれだ。」

何ぜともなく宇津はさう思つた。

「間違ひはない。」

彼は何か恐れに似た感情の湧き上るのを感じたが、なほもその青年の顔を見つづけてゐると、その青年は明子の移動していくに從つて、切れ目の長いよく光る眼を動かしていつた。それは誰の注目も引かないやうな靜かな上品さを保つたものであつたが、何より宇津の心を引きつけたのは、しとやかなその青年の幾分憂鬱さうな口もとと顎とであつた。

しかし、ただその青年が明子を見てゐるといふだけで、自分が明子とその青年とを結びつけようとしてゐるのは、これはたしかに正當な判斷ぢやないと宇津は思つた。さういへば出て來るときから、そはそはしてゐる雪枝の擧動の原因も、何となくその青年と關りのありさうな考へを、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

自然に自分はしてゐるやうに思はれてならぬのだつた。

「これや、よほど俺もどうかしてゐる。やめよう。」

宇津はまた眼を轉じて雪枝がさつき會釋した方向に視線を向けた。すると、その一角では、もう雪枝が人の中に埋れて二三人の友人と笑ひながら話してゐるのが小さく見えた。それを遠くからじつと見つづけてゐると、いかにも幸福さうで、自然にこちらも微笑せずにはをれなくなつたが、また明子はどこかと探し始めると、再びさつきの青年の方へ視線はいつの間にか移つていくのだつた。ところが、このとき、彼が青年の向つてゐる視線の方向に從つて眼を辷らせていつてみると、明子は遠く離れながらも絶えずその青年に笑ひかけながら、傍の誰かと話しつづけてゐるのだつた。

「それぢや、當つた。」と宇津はまた思ひ出した。

彼は前からかういふ場合に働く自身の勘を信じる癖がついてゐて、またそれがいつもぴつたりと當るので、あんまり度度あたると自分ながら時々脱れて欲しいと思ふことさへあるのだが、今も彼はこの自分の勘の働きに從へば、何事かこのままでは安全にすんでいきさうにも思へぬ、漠然とした不安な氣持ちに襲はれ始めてならなかつた。

「いや、しかし、人といふものはめいめい勝手に、今の自分のやうに眼に映つた特種なものを繼ぎ合せて、自然に獨特の世界を構想して、それで世の中を見ようとしたがるものだ。そのそれぞれの勝手な構想が入り混つて、初めて客觀世界を造つてゐる。」

宇津は今に限らずいつもさう思ふ癖もある。そのためでもあらう、またこのときもそれを思ふ

と、自分のさきからの幻想もただありふれた主觀の世界で、間違つてゐるかもしれないとも思ふのだが、それにしても、

「ああ、あの明子の喜びやうはどうだらう。あんなにまで喜ばなくたつて。」

と宇津はひやひやしながら明子の方を絶えず眺めては、看視せずにはをられぬのであつた。

「危い、あれは無茶だ。」再び幕が上ると、グランドピアノが二臺竝んで現れた。すると、一人の少女と伴奏の教師が出て來て、すぐベートーベンの三十七番が始つた。しかし、雪枝は一向に戻つて來なかつた。身動き一つしない聽衆の沈まりつづけた頭の上を、宇津の想念はピアノの諧調に從つて馳けめぐることをやめなかつた。彼はまだ自分の知人でここへ來てゐる總てのものを見たわけではなかつたから、いまにのこのことこの聽衆の中から澤山現れて來るにちがひないと思つた。その中には、一人や二人は自分と雪枝とがただ二人でここへ來たことを不思議に思はないものばかりとは限らないが、しかし、自分は雪枝と青木との戀愛が、ほとんど破れようとしてゐる現在の危險を防がうとしてゐる一心であるだけだと思つた。

一昨夜も彼は青木と銀座で逢つた。そのとき、宇津は青木に雪枝のことを尋ねると、「どうといつて、別に何んでもないね。」と云つただけで、不快さうに顏を反らして默つてゐた。いつたいあれはどちらからあんなにこじれていつたのだらう。もしかしたなら、青木は明子を愛してゐるんぢやなからうか、と思ふ以外に、宇津には未だに少しも見當がつかないのである。しかし、分らないといへば、雪枝の姉の瀧子の氣持ちは一層彼には分らなかつた。瀧子は一度ある大きな商人の息子と結婚したことがあつたが、一年もたつとすぐ戻つて來て、今は何事もすることがな

く、ただぶらぶらと日を送つてゐるだけだつた。噂によると、結婚前に一度誰かと戀愛をしたのが破れたため、結婚後にもそれが影響して夫婦の間が冷くなり、瀧子の方から戻つて來て歸らないのだといふことであつたが、いまだに前の主人の方が復縁を迫つて來てしやうがないといふことを、宇津は一二度耳にしたこともあるにはあつた。しかし考へてみれば、もしそれが本當なら、妹の雪枝も姉と同じやうな徑路を辿らうとしてゐるのではないか。——

宇津は雪枝や瀧子とはまだ知り合ひになつてから日が淺いので、彼女の家の樣子はよく分つてゐると云へる方ではなく、ただ今のところは、逢ふ度の顏色だけで二人の氣持ちを勝手に判斷してゐる以外には仕樣がなかつた。

宇津が千早家の瀧子や雪枝と知り合ひになつたのは、青木の家でピアノの稽古のある日に、ときどきそこで落ち合つたときからが始まりであつた。宇津はピアノはそんなに上達してゐるといふほどではなかつたが、ある大學で音響學の講座を持つてゐる傍ら、青木から調律を習つたので、頼まれればつい片手間に調律もやつて暮すのが習慣となつて、遊びかたがた傍を通ると瀧子たちの家へもよく出かけてピアノを覗きにいくやうになつたのである。それに、瀧子達の母は宇津と鄕里が偶然に同じだつた。そのため千早家へ彼が出かけて行くのは、一つは彼女たちの母と鄕里の話をする樂しみが多かつた。最初宇津が出かけていつたときには青木と一緒だつたが、瀧子の母が宇津の鄕里が自分と一緒だと知つてからは、誰にも增して宇津を親切にし始めた。二度目からは、娘たちより母の方がひとりで話を奪つてしまつて、宇津をなかなか放さないほどだつた。

宇津と千早家との關係は先づそんな風に簡單なことであつたが、青木の家と千早家とは祖父以

來から續いてゐる複雜な關係があつた。青木家と千早家とは、舊藩主が同じで家柄も等しかつたところから、代代と親しい交渉をもつて連つて來てゐるうへに、父達の關係會社もまた同じ系統のもとにあつた。そのため二家の盛衰はいつも一致して進んで來てゐる。しかし、二家の關係してゐるある護謨會社が、他會社との合同のため、株主が二派に分裂してしまひ、株主爭奪の渦卷に卷き込まれて久しい間の交誼は幾分惡化して來つつあるのは事實だつた。だが、そんなことは、雪枝と青木義夫との間の決裂にまで影響を及ぼしてゐようとは想像されることではなかつた。

ベートーベンは拍手の中に終つた。宇津は外氣を吸ひに廊下へ出た。しかし、廊下にはあまり休息に出て來る人人は見られなかつた。だいたい、この日の呼び物は最初のメンデルスゾーンの合唱で、ミラノから初めて歸つて來た指揮者の指揮振りにあるのだが、聽衆は普通一般の劇場で催される演奏會のやうに華美なものではなく、會員制度のためでもあらう、眞面目で熱心で、身動き一つしようとしない聽衆ばかりのため、一二の演奏でいつの間にかもう宇津は疲勞を覺えてゐた。

彼は煙草を吸ひながら、窓の外に繁つてゐる樹木の間を飛び渡つてゐる小鳥に眺め入つてゐるとき、ふと近よつて來た足音を聞きつけて後ろを向いた。すると、さきに見た例の立派な青年が彼の傍を通り拔けて、つまらなさうに、ゆつくりとした足どりで歸つていかうとするところだつた。

「何んだ、明子をほつたらかしといて、もう歸るのか。」とかう宇津は思つた。

宇津は絕えず無意識のうちにもその青年のことが頭に流れてゐたために、もう歸つてしまふの

だと知ると、急に自分勝手に描いてゐた今までの空想が、ぶち碎かれてしまふ手頼りなさを感じた。それもその青年が全く見えなくなつたときには、意外に強くがつかりとした氣持ちになつたのを思ふと、ひどく自分がその青年にひきつけられてゐたのに氣附いて不思議な氣さへするのだつた。

ベルが鳴つた。次ぎはヴアイオリンでバツハの協奏曲がある。宇津はまた階段を昇つていつた。さうして、ホームの入口へ這入らうとしたとき、がたりと向ふからドアが開いて出て來た婦人に危く突きあたらうとした。

「あら。」

婦人は瀧子だつた。

「さつきからお探ししてましたのよ。ちよつと。」

瀧子はさういふとまた閉らうとするドアを片手で持つて、宇津の中へ這入るのを待ちながら、宇津が中へ這入つてしまふと自分は這入らうともせず、すぐそのまま外へ出ていつた。

宇津は雪枝がもう自分の席へ戻つて靜かにヴアイオリンに聽き入つてゐるのを見た。その横へ彼も靜かに腰を降ろしてまた明子の方を眺めてみた。明子はあの青年がゐなくなつたことにはもう氣がついてゐるらしく、今は思ひあきらめたかのやうにきよろきよろとはしなくなつて、落ちついて一心にステーヂの方を見つめてゐた。

「しかし、これも勿論、何事でもないのかもしれない。自分は氣を廻したのかもしれない。いや、あのやうな優れた青年を見れば、自分だつてこんなに氣が廻るのだ。」

宇津は何事によらずどこかに滑稽なところもあつて、誰からも好感を持たれる性質であるが、彼の内面では滑稽どころか、人のことまでくよくよと心配しつづけてやつてゐるほど、苦しい眞面目さに絶えず滿されてゐるところがあつた。そこが他人から見れば一層滑稽に見えて來て、つい宇津に逢ふと誰も彼も一言ぐらゐはからかつてやりたくなり、悲しさうな顏の一つもしてみたくなつてくるといふ具合だから、また一面そのためでもあらう、娘たちを多く持つてゐる母親などからも、この上なく信頼されて喜ばれるところでもある。しかし、一ついけないことには、本人の宇津がその自身の特質を知つてゐて、ときをり他人の評價に從つて自分が動いていかうとすることだつた。つまり少し下品な言葉を使ふなら、その手を心得てゐることである。けれども、これも宇津ほど何事でも信頼せられる人物といふものは、いつもいつも彼の行くとこ來るとこ、自然にそんな風が吹いていくのだから、仕方がないと云へば云へるのだ。勿論、その上に、宇津はそんなことにのうのうと圖にのつてゐる自分を感じると、突然良心の苛責を感じてふさぎ込むこともあるのだから、それさへ惡いといふやうなら、彼には立つ瀨がないといはねばならぬ。

ヴアイオリンの獨奏は、彈き手がひどく肩とヴアイオリンを振り廻した以外には、特に云ふべきほどのこともなく濟んでしまつた。次ぎはブラームスの「竪琴に寄す」である。宇津は瀧子と今そこで逢つたことを雪枝に話した。すると雪枝は場内を見廻しながら、

「ぢや、もう歸つたんかしら。」と呟くやうに小聲で云つた。

「あなたはもうお逢ひになつたんですか。」

「ええ、もうさき向ふで逢つたのよ。何んだかしらないけれど、姉さんひどく周章ててるのよ。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com